4/16 福井

あしたを築く
ふくい・子と親の風景
■4■

“大家族”で孤独解消

広がる子ども食堂

「大家族ができたみたいで、ほんま楽しい」「人生でこんなに楽しいところがあったんか」。大勢で食事を取る小学生の笑顔が弾ける。

敦賀市の中村幸恵さん(50)は昨年9月から月に2回、同市男女共同参画センターで「こども食堂　青空」を開いている。この日の献立は、イノシシ汁、鶏肉と大根の煮物など約10種類。食材は、個人や地元業者などからの寄付で賄っている。

参加する子どもは毎回20人ほど。一緒に食事をすると、いろんな話をするようになる。嫌いな野菜も、みんなが食べていれば、思わず食べてしまう。

弟の面倒を見るために学校に行けない小学生、冬でもシャツ一枚の小学生、給食以外に食事を取っていない中学生…。中村さんは、こんな子どもが近くにいることを、知り合いから聞いた。「貧困は都市部の話。関係ない」という漠然とした思いは打ち砕かれ、食堂の開設を決めた。

経済的な理由や、家庭の事情で十分な食生活が送れない子どもたちに、無料や低料金で食事を提供する「子ども食堂」の動きが県内でも広がり始めている。

子どもと大人が一緒に夕食を囲んだ「こども食堂」＝3月、あわら市田中々のあわら敬愛こども園

■　■　■

あわら市田中々のあわら敬愛こども園で1月にオープンした「こども食堂　まる」。2回目の参加という小学生の男子は「親は仕事なので、家では一人でご飯を食べるから寂しい。みんなで食べるとおいしい」と話し、ご飯を3杯お代わりした。家での晩ご飯は、カップラーメンのときもあるという。

食堂を開く前、同園の渡邉一幸園長(56)は、あるきっかけで、不登校の中学生を週に数回、園に招き一緒に昼食を取るようになった。それまでこの中学生は毎日、母親から与えられたコンビニ弁当を食べていた。

中学生は口数が少なかったが、徐々に話をするようになり、ついには学校に通えるようになった。「食の力を再確認した」と渡邉園長は話す。

■　■　■

子ども食堂は都市部で始まり、全国に広がっている。滋賀県では9市1町の16カ所で開設。公民館や福祉施設、自宅、空き家など場所はさまざまだ。ある商店街では、生ビールの売り上げ1杯につき10円を、子ども食堂の運営費に回し支援している。

同県社会福祉協議会によると2014年、福祉団体や県、市町などが基金を創設。1食堂につき、3年間で40万円を助成しており、18年度までに小学校区単位の230カ所での立ち上げを目指す。

敦賀市の中村さんは6月にも、市内の老人施設に2カ所目の食堂を開く。施設側の要望を受けた開設で、場所代は無料だ。施設を運営するNPO法人「ふくいの福祉家」の西野幸治代表理事(40)は「子どもが施設にも立ち寄ってほしい」と食堂に期待する。

食堂運営には民生委員や保育士、調理師などが加わり、活動の幅は広がりつつある。一方で、遠方の子どもは通えないことなどから、中村さんには「子どもたちを救いきれていない」という思いがある。それぞれの地域で、そこに住む地域の実情をよく知る人たちが運営する食堂こそ、理想の形だと考えている。

（堀英彦）

＝おわり＝